

## B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

戸荻 進・中尾正三・新村泰子・佐藤クニ子・

酒井為久・霜田美津子・盛田義彦

### 総 説

#### I. 目的

生徒の管理・指導の目標は、しっかりしたものであって、外的な条件により軽々しく浮動するようなものであってはならないことは、いうまでもない。しかし逆にまた小徳目的に、あるいは細則的に、余りにも細部に至るまで規定しすぎて、生徒や教師の発展を束縛するようなものであってはならないこともまた確かである。

このような意味において、特に本校における生徒の管理・指導の一貫性と発展性とを具備した原則は、如何に在るべきかを実践的に追求してゆきたいと考えている。

#### II. 問題点

以上のような角度から、われわれのグループにおいて本校の現状について討議しあい、次のようないろいろの問題点のあることを確認した。

##### (1) 生徒の躰

どのような面について、どの程度まで、どの時期において、如何にして徹底させるか。特に中学・高校間のけじめと一貫性について。

##### (2) 高校「倫社」・「保健」・「L.T.」と中学の「道徳」との関係

これらは中学の「道徳」を無駄にさせぬためにも、さらに積極的により稔り多きものとするためにも、根本的に考えられなくてはならない。多くの面を考えることができる。

##### (3) 歴史の浅い学校の誇りと抛り所

われわれの社会における小集団のもつ自負が、客観的にその価値をその属する大集団によって認められたとき、それは、その大集団の誇りとなる。この誇りが、その集団構成員に対して果す自制作用は極めて大きい。歴史の古い学校においてはこのようなものが時の淘汰を経過して確立されているが、本校のように歴史の浅い学校においては、これを如何にして確立していったらよいであろうか。

(4) 本校の生徒にじっくりした超学年的「道徳」の中核を如何にして求めるか。

本校の現状を見る場合、教師それぞれの持味は一応生かされているが、学校全体としての人間教育の焦点は未だ必ずしも明確には絞り上げられてはおらず、この点が生徒の人間形成の面で、やや迫力を欠く一つの原因となっていることは否めない。この中核を確立することはわれわれの当面する急務である。

##### (5) 生徒管理・指導の組織化

小教定員の学校から出発した本校も、やっと昭和40年度から高校が1学年3学級となり、付中出身者が大半を占めるために生じた従来の出発点における高校の中学化（余り望ましくない意味での）の最大の要因は一応とり除かれることになった。

この好機をとらえて、生徒管理・指導の組織の合理的な姿について再検討することは、必要なことであるばかりでなく、興味深い問題でもある。

##### (6) 生徒会活動とクラブ活動の関連と調整

この両活動の相剋が、相互の成長のための刺戟となることは望ましいことであるが、現実には往々にしてその逆の現象が見られることが少くない。この原因はどこにひそんでいるのか、またそれを如何にして排除していったらよいかも極めて重要な問題である。

#### III. 研究計画とその推進

以上の諸問題の解決の第一歩として、本年度は主として、それぞれの問題点の本質あるいは、その原因と推測される諸条件を明らかにする目的をもって、調査・分析に主力を注ぎ、来年度はその結果の上いろいろな試みを積極的に行い再来年度には、それらの検討修正の上に一応の結論を得たいと考えている。

本年度行なった各種の調査については、それぞれ中心となって立案推進する責任者を定め、要所々でグループ全員の討議により検討・修正を加えた上でこれら

## 共 同 研 究

を実施し、さらに責任者を中心として整理された結果の検討もグループ全員でおこなうという方法をとってきた。この方法は、明年度以降の各段階にも大筋としては、そのまま踏襲される予定である。

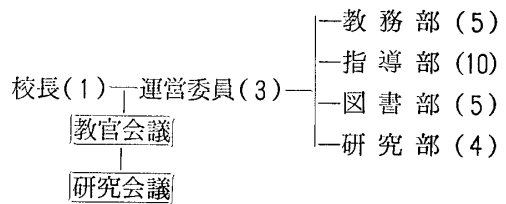
### IV. 本年度の結果

以上のような方法により、今迄にわれわれの得た成果を次に第1～4報として報告する。第1報は、昭和40年度の国立教育大学協会付属連盟の高校部会研究大会においてその要点を発展したもののまとめであり、第2～4報はそれぞれ報告をまとめた者が責任者となり全員のグループ研究としてまとめたものである。

育の形態にも大きな変化が予想されることになった。この生徒構成の変化に伴うグループダイナミックスの過程を、客観的に把握するとともに、さらにその変貌が望ましい形で行なわれるよう、指導部が中心となって、三ヶ年の計画で継続的に実践研究を推進していくことになった。研究主題は「発展的目標をもった生徒の管理・指導」であるが、今回の発表は、こうした実践研究の手がかりをみつけるためにわれわれが行ってきた事の中間報告である。

なお、参考までに本校の運営組織の概略と生徒構成とを書いておく。

### 第1報 生徒管理・指導の基盤としてのホームルームの運営



#### I. はじめに

本年度から高校が学級増になり、附中出身生徒と外部出身生徒が半々となった。それに伴ない好むと好まざるとにかかわらず、従来の中学からの六ヶ年一貫教

- 備考 1. 教官会議と研究会議は隔週に行なう。  
2. ( ) 内は教官数。全員中高併任。

学 年		中						高							
		1		2		3		1			2		3		
ク ラ ス		A	B	A	B	A	B	A	B	C	A	B	A	B	
生 徒 数		44	43	46	47	43	45	48	49	47	53	54	53	54	
内 訳	男	24	24	26	27	23	25	30	30	29	31	31	30	31	
	女	20	19	20	20	20	20	18	19	18	22	23	23	23	
	出身校	附							27	26	25	43	41	45	43
		外							21	23	22	10	13	8	11

備考：この表には、出身校別の関係もあり、中学についても示したが、以下のすべての表は高校のみについてのものであるから念のため。

### II. 第一学期のロング・タイムから

#### 1. 印象に残ったL, T

本年度の第一学期に実施したロング・タイムの中で、特に印象に残っているものを調査した。

〔(問) 一学期に行なったLTの中で、一番印象に残っているものを書きなさい。〕

	1 A	1 B	1 C	2 A	2 B	3 A	3 B	平 均
有として書いたもの (%)	77	94	87	71	85	92	57	80
無 記 (%)	23	6	13	29	15	8	43	20

印象に残ったLTの中で、ある程度票数のあるものの題目と票数とをHR別にまとめてみると。

B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

1	A	友情について ベトナム問題について フォーク・ダンス クラス役員選出	1 0 9 9 4
1	B	日本の軍備について 水泳 ソフト・ボール グループ作り	27 7 4 4
1	C	男女交際について レコード・コンサート バレー・ボール	2 0 9 7
2	A	恋愛について 水泳	2 1 6
2	B	プラズマ研究所見学 読書について	3 6 4
3	A	X氏からの手紙 レコード・コンサート 入試について バレー・ボール	2 5 7 7 6
3	B	三分間スピーチ 進学について	1 5 4

さらにこれらの時間の中で、どういう点が印象に残ったかという調査の中から、代表的な数例をあげてみる。

〔1 B. 日本の軍備問題について〕

- 日本の将来・憲法・政治を取り扱った内容が印象に残った。(14)
- 結果として、クラスの各人の考え、意見・思想がわかった点が印象に残った。(7)
- 発言が多く、よく討論した点。(2)
- 担当の班がよく調べてきた点。(3)

〔2 A. 恋愛について〕

- 身近な問題を深く考えたことが印象に残った。(7)
- クラスの各人の考え方がよくわかったから。(4)
- まとまりがあるように思えたから、なんとなく印象に残った。(4)
- この時間の運営のしかたで、皮肉にも問題の中心がはっきりしなかった点が印象に残った。(7)

〔2 B. プラズマ研究所見学〕

- 興味ある研究所を見学し、科学の進歩のすばらしさに感嘆し、名大にこんな立派な所があるということを知った点。(23)
- 教室から出て、LTを行なったという点が印象に残っている。(7)
- 見学態度がわるい者が一部にあったが、全体としてまとまっていた点。(3)

〔3 A. X氏からの手紙〕

- 結果として、自分の性格やクラスの中の自分がわかったから。(21)
- あまり益のない内容だが、その時間の中ではおもしろく感じた点。(3)

次に、LTの時間に対する生徒の興味・関心度を調査して、毎週木曜6限のこの時間がどの程度待望されているかを調べた。

(問) [ LTの時間は、次の8つの中で何番目ぐらいに好きですか。  
LT 国 社 数 理 英 芸(家) 体 ]

共同研究

	1A	1B	1C	2A	2B	3A	3B	計
1番好き	3	2	1	1	2	1	1	11
2～3番ぐらい	18	18	22	12	9	8	15	102
4～5番ぐらい	11	18	17	21	25	28	25	145
6～7番ぐらい	10	7	7	10	13	7	13	67
1番きらい	3	3		7	5	8	4	30

その理由を、LTが好きなもの(1～3番)とLTがきらいなもの(6～8番)に分けると次のようになる。

〔LTが好きな理由〕

積極的なもの……計46%

- 内容に興味があり、何か身につくものがある。(12%)
- 討論することが好きだから。(11%)
- 生徒の手で運営できるから。(9%)
- クラスの調和がとれ、まとまりがつくからよい。(8%)
- 友達の考えがわかり、親しめる。(5%)
- 担任の先生の考えがわかり、親しめる。(1%)

消極的なもの……計54%

- 嫌いな科目が多くあるから。(27%)
  - 息抜きのできる時間である。(27%)
- 〔LTがきらいな理由〕
- 意見のやりとりだけで、内容がない。(37%)
  - まとまったLTにならない。(15%)
  - テーマに興味のないものが多い。(11%)
  - 充実した活動ができない。(11%)
  - 意見を出す人が限られている。(8%)
  - 運営のしかたが下手である。(8%)
  - 無責任な発言が多いから。(3%)
  - 先生が話をしすぎる。(2%)
  - 教科の方を重く考えたい。(5%)

LTが好きな理由に、消極的なものが多く、LTがきらいな理由に、批判的なものが多くなっている。毎時間印象に残るLTを行なうように心がけることが、LTへの積極的な関心を高めることになる。ことに、1年においては比較的興味・関心度が高いにもかかわらず、2年3年で低くなる傾向は、現在の大学受験制度の問題と合わせ考えていくべき問題も含んでいるように思われる。

2. LTの記録

ロング・タイムについては、毎時間、生徒と担任が別々の用紙に記録して、指導部へ提出することになっている。様式は次のようで、簡潔に記録することができる。

○ 生徒によるL.T.の記録様式

No.	月	日	曜	記入者氏名	クラス
題目					
内容					
感想					

○ 担任によるL.T.の記録様式

No.	月	日	曜	クラス
題目				
準備				
展開				
反省				
感想				

生徒の印象に残ったLTを、その順序に掲げて、記録例とする。

〔(生徒の記録) 2B 6月17日〕  
〔名大プラズマ研究所見学〕

- 内容 1. 所長あいさつ、プラズマについての説明  
2. 所内見学

感想 プラズマとは一体何だろうと疑問をたいて所内に入った。所長の説明でプラズマの概略が納得できたと思う。所内の設備は、皆珍しく複雑なものばかり、操作がさぞ難しいだろう。今後このようなチャンスを作っているいろいろな所を見学したい。

## B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

〔(担任の記録) 同上〕  
プラズマ研究所見学〕

準備 14日(月)に、生徒からの希望によりプラ研事務長に連絡。15日(火)詳細決定。

展開 伏見康治所長の講話(20分)の後、所内見学、榊原掛長案内。

反省 生徒にはやや高程度。

感想 一部にややうるさい生徒あり。

〔(生徒の記録) 1 B 6月17日〕  
日本の軍備について

内容 自衛隊の存在について

憲法上から話し合う。

実際問題として話し合う。

現在の日本の政治のあり方について

安保条約など批判的な意見が多かった。

感想 かなりよく考えている人もあり、頼もしく思った。こういう問題は、やはり男子の方が関心が深いようで、女子の意見が1つもなかったのが残念である。

H. R. で話し合ったからといって、急に、日本の政治に影響するわけでもないが、皆が政治に関心を持つようになれば自然に世論が高まり、後々にはほんの少しずつでも変わっていくのだから、この種の話合いを粗末にはできないと感じた。

これからも機会をみてこのような討論会をもちたいと思う。

〔(担任の記録) 同上〕  
日本の軍備について

準備 1. 責任グループが、今週何をとりあげるかを話し合う。

2. 題目がきまってS. T. にクラスの人の何%位、このような問題に関心を持っているか調べる。

3. グループの人々は図書館でしらべたり、「世界」を読んだりする。

展開 憲法第九条を板書する。

この第九条に対してどう感ずるか。

自衛、交戦権に対する解釈。

自衛隊についてどう思うか。

日本の政治家はもっとしっかりしてほしい。

反省 クラスの約半数は、このような問題にほとんど関心を持っていないようだ。時々、このような問題を取りあげるのもよいと思う。途中で目の検査のため約15分中断したため、討論が行きとどかなかったのは残念。

〔(生徒の記録) 3 A 6月17日〕  
X氏からの手紙

内容 1. 用紙を各人2枚受けとり、端に各自の名前を書く。

2. それらを集め任意に2枚ずつ配る。

3. その用紙の名前の人について、各人が思うこと(長所、短所、どんな方面にむいているか)を書く。

4. 再び集める。

5. 本人に返す。

6. 発表。本人が自分につごうの悪い点を省いて発表する。

感想 内容の1はS. T. を利用し、2~5までは20分で行なう。内容の6に25分間と、スムーズに進んだ。

皆、書く時も、読む時も、あまり深く考えず、楽しくほがらかに過ぎた。無責任な内容はなかったようだ。

ほとんどの人が「自分の背中」を知らされたようで、今後の行動にそのアドバイスが生きてであろう。先生の意見、「全般に有意義であった。」

〔(担任の記録) 同上〕  
X氏からの手紙

準備 1. 前のL. T. で「X氏からの手紙」NHK録音をきき、その方法・順序を知らせる。

2. 用紙を生徒に準備させる。

展開 1. 運営委員で順序を説明する。

2. 記入。回収。

3. 自分のものを読む。

反省 高3で行なうときは、長所や短所やタイプでなく、むしろ、進路と関係づけて書くように指導した方がよかったと思う。

感想 1. 生徒の個性の一面がわかりよかったと思う。  
2. 爆笑がつづき、なごやかなHRの時間であった。

〔(生徒の記録) 2 A 6月24日〕  
恋愛について

内容 1. 異性も、性を無視して考えることができるか。

2. 周囲の男女交際への目はどうか。又、どう感ずるか。

3. 学生時代の友情はどうあるべきか。

4. 学生として、恋愛はしてよいものだろうか。

意見をまとめると、

1. ある面では無視できる。すべての面では無視できない。

2. 自由。暖かい。

共 同 研 究

- 3. 同性の友情。どちらともいえない。
- 4. 経済的理由のため不可能。やりたかったらやってもよい。

感想 グループ単位の意見発表であったが、なかなか意見がでない。真面目に考えている人が少ない。

〔(担任の記録) 同上〕  
恋愛について

準備 題目(細目も)を黒板に記しておく。

- 展開
- 1. 異性を性を無視して考えることができるか。
  - 2. 高校時代において、異性交際をどう考えるか。
  - 3. 周囲の男女交際への目はどうか。
  - 4. 高校生として、恋愛してよいものか。

反省 いろいろな意見がでて、活発な論議が展開して

いたが、どうも公式論に終わってしまった感がする。高校生活においてどうあるべきかという具体的な意見がでなかったのが残念である。

提出されたLT記録は、指導部において整理し、相互研修の材料や各HRのLT計画の資料として活用している。

第一学期のLT記録を一覧して、最も目につくことは、担任の記録の「準備」が充実している時間の、生徒のLT記録は生き生きとしていることである。LT活動が充実するかどうかは、準備段階で決まるといえるのである。こうした結果を、そのHRのみでなく全校のLT活動にフィード・バックできるという点で、この形式のLT記録はかなり効果的なものと考えられる。

3. LT の 運 営

第一学期のLT実施状況は次の通りである。

	1 A	1 B	1 C	2 A	2 B	3 A	3 B
4・15 (木)	○生徒会 クラス委員 選出	○ " 左	○ " 左	○HR活動 の方針	○1学期の LTの計画 と運営	○高3のH Rの理想 像	○HRの活 用
4・22 (木)	HR生活 と遠足	" 左	" 左	遠足につ いて	○ " 左	○ソフト・ ボール	○進路につ いて
5・6 (木)	LTの運 営	" 左	○ " 左	読書につ いて	" 左	○受験につ いて	レコード・ コンサート
5・13 (木)	グループ 作り	" 左	○ソフト・ ボール	趣味につ いて	○フォーク ダンス	○校長講話	ソフト・ ボール
5・20 (木)	○友情につ いて	ソフト・ ボール	" 左	" 左	○ " 左	○悩みのア ンケート	○クラブに ついて
5・22 (土)	ソフト・ボール大会(クラス対抗・対金大附高戦予戦)						
6・3 (木)	生徒会予 算につい て	" 左	" 左	" 左	" 左	" 左	バレー ボール
6・10 (木)	生徒総会(生徒会予算審議)						
6・17 (木)	○フォーク ダンス	日本の軍 備につい て	○レコード コンサー ト	友情につ いて	○プラズマ 研究所見 学	○X氏から の手紙	三分間 スピーチ

B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

6・24 (木)	バレー・ボール	○ 水 泳	○ 男女交際について	恋愛について	○ 男女交際について	バレー・ボール	ベトナム問題について
7・1 (木)	ベトナム問題について	○ バレー・ボール	○ バレー・ボール	水 泳	意見発表会	レコードコンサー	三分間スピーチ
7・15 (木)	バレー・ボール大会 (クラス対抗)						

表中の○印は、学期のはじめに計画表を各担任において作成し、指導部へ提出しているが、それと合致したものである。LT計画表は担任個人で作成提出した

ところと、生徒と共に作成し提出したところがあるが、その差異は次の調査の結果に徴しても明らかなのがある。

〔(問) LTのやり方でよいと思う点を書きなさい。〕

	1 A	1 B	1 C	2 A	2 B	3 A	3 B
グループ単位による運営	◎	◎	◎。	◎	○		
LT運営委員による運営						◎	
計画がたっていること	○	○			◎	○	
意見がよく出て、皆が協力的であること	○	○	○	○	○		○

○ 5～9人      ◎ 10～19人      ◎。 20～29人

LTの目標を達成し、印象に残るLT活動にするにはどうしたらよいか。この問題について本校の実践からは少なくとも次のことをいうことができると思う。

- (1) 計画は生徒とともに、一定の時間内にたてる。計画のサンプルを広く利用する。
- (2) グループ単位による運営。又は、LT運営委員による運営をする。
- (3) 「準備」の段階を充実して、皆が協力しやすいようにする。

以上は、IIの1.2.の諸調査から、1B・1C・2B・3AのLT活動が比較的充実していること、および、3.のLTの運営の諸表に一応裏づけられていると思う。

4. HRによるちがい

まず〔HRの雰囲気や形づくっているものを生徒がどのように考えているか〕について調査した結果をまとめてみると次のようになった。数字は%。

	1 A	1 B	1 C	2 A	2 B	3 A	3 B	平均
担 任	15	21	13	17	17	23	24	19
ク ラ ス の 委 員	13	10	12	19	26	12	9	14
L T の 係	5	5	7	4	4	11	7	6
生 徒 会 役 員	2	0	4	10	11	3	3	5
附 中 出 身 生 徒	21	14	22	24	21	21	24	21
外 部 中 学 出 身 生 徒	26	28	18	6	4	5	7	13
男 子	15	22	18	14	15	15	14	16
女 子	3	0	6	6	2	10	11	5

この表から、学年によって共通するものが浮んでくる。卒業学年の3年では、担任を中心にしたまとまり

が見られるようになり、2年ではクラス委員や生徒会役員の活動が中心になっており、また、全体的にLT

の係は、クラスの雰囲気づくりにそれほど大きな影響を与えていないのが現状である。1年において、外部の中学出身者がクラスの雰囲気を左右しているとするのは附中出身者で、その逆もそのまま成立しているこ

とは、本校の1学級増に伴う体質変化の端的なあらわれとして、いろいろな意味で見落とすことができない。

次に、〔クラスの短所〕をあげさせた結果。

	1 A	1 B	1 C	2 A	2 B	3 A	3 B	計
非協力的で、まとまりがない	26	20	20	30	23	10	39	163
その他の記述	35	29	34	25	24	57	37	241

となった。そこで、LTの目的をどう考えるかという問いをしたところ。

	1 A	1 B	1 C	2 A	2 B	3 A	3 B	計
クラスとしてのまとまり、調和	17	19	26	27	17	21	30	157
その他の記述	38	28	21	22	34	39	21	203

となった。ついで、〔第一学期のLTで、気持ちよくまとまった活動をしたもの〕の題目を書かせたところ、次のようになった。

	1 A	1 B	1 C	2 A	2 B	3 A	3 B	計
有として書いたもの	23	26	28	16	17	20	20	150
無記	25	23	19	37	37	33	34	208

以上は、クラスのまとまりとLT活動とを関連させて考え、同学年のHR間に何らかの相違が見られるようなことがなかろうかと考えて行なった調査の結果であり、確かにこの面でも何かがあることは感じさせられるが、学年初めにクラス編成を行なったばかりでもあり、断定的なことは今後にまきたいと思う。

### III. ホーム・ルームと生徒指導

#### 1. 指導部の役割り

まずこの角度からの問題を洗いだす目的をもって、校風（学校の雰囲気）を形づくる要素と級風（H・Rの雰囲気）を形づくる要素を生徒達がどのように考えているかを調査してみた。調査方法は、〔問、次の中からこの学校の校風（H・Rの雰囲気）を形づくるのに大きく影響していると思うものを、影響力の大きい順に3つ選び記号で答えなさい。〕として、次の選択肢を並べ、答の数を単純に合計したのである。

・附中出身の生徒 ・附中以外の中学出身生徒 ・男生徒 ・女生徒 ・クラスの役員や委員 ・生徒会の執行部 ・クラブのリーダー ・LTの運営の係。担任  
 ・校長 ・教科を教える先生 ・指導部の先生 ・生徒の家族や家庭環境 ・附中生 ・先輩 ・上級生 ・下級生 ・名大生 ・その他

調査結果を整理した図表を次に示す。

二つの図表から言えることは、

- ・校風にあつては教師の果す役割りが大きく、中でも、指導部教官の影響力は多大なものがあるが、級風では教師の影響力は小さい方であつて、それも担任教官のみに限定されている。
- ・生徒の代表としての生徒会執行部は、校風に影響を与え、クラス委員は級風に影響を与えている。
- ・H・Rを構成する生徒が直接に級風を形づくる重要な要素となっているのに対し、校風にあつては、教師と生徒の代表と一般の生徒の三者が、ほぼ同等の役割りを果している。
- ・校風を形づくるもの

区分	比率	比率の内訳				
		10	20	30	40	
教師	38%	指導部の先生(20)		校長(8)	担任(5)	教科を教える先生(5)
生徒の代表	22%	生徒会の執行部(17)		クラスの委員(3)	クラブのリーダー(1)	LTの係(1)
一般の生徒	30%	附中出身の生徒		上級生(9)	男子(3)	女子(1)
環境	10%	生徒の家族や家庭環境(45)		先登(3)	名大の学生(0.5)	
						附中生(2)



## B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

### ○ 級風を形づくるもの

区分	比率	比率	13	率	20	の内	30	訳	40
教師	20%	担任	(17)			教科を教える先生(2)			
生徒の代表	25%	クラスの委員	(13)	L.Tの係	(6)	生徒会執行部(4)	クラブのリーダー	(2)	
一般の生徒	53%	附中出身の生徒	(19)	男子	(15)				
環境	2%	附中生	(1)	生徒の家族や家庭環境	(1)				

○ 校風は環境に支配される面も見のがせないが、級風においては、ほとんどその影響が認められない。

などである。これらの中で、担任・クラスの委員・生徒会の執行部は級風と校風の両方に多少なり影響力を持っているが、校風を形づくる有力な要素である指導部教官や校長が、直接に級風に関係するところは事実上認められない点が目立っている。

指導部が生徒指導の消極面（たとえば非行問題）の処理に終始するなら、この指導部とH・R間の直接のつながりがないことはさほど問題にしなくてもよいと思う。しかし、本校のように、生徒指導の積極面（たとえば生徒会活動）の推進にも留意し、校風に寄与するところが大きく、生徒指導の基盤としてH・Rを考える場合には、指導部とH・Rの間は密接で有機的なつながりが必要となる。

この点こそわれわれがとり上げなくてはならぬ問題の最も大きなものである。その実践の第一歩として、次に間接に指導部のタッチしたLT活動の2・3の例をあげてみよう。

## 2. 共通のL・T

〔2年の場合〕

5月上旬、図書館の係りから2年生の間に「獣の叫び」（高校生新書）が広く読まれているらしいとの報告があった。個人指導の結果によると、性を扱ったこの小説を興味本位で読み、20名ぐらいのものが本の回覧をしているということであった。中には、性を扱った内容にひどくショックを受けた生徒がいるし、そうでなくとも煽情的な内容の文書の多い昨今、この問題を放置しておくことは教育的でないことは明らかである。

そこで指導部では、「獣の叫び」を輪読して、この小説の内容が興味本位に読まれやすいことを検討し、対策を話し合った。結果として、この種の小説を読む

ことを禁止するのは、かえって単なる好奇心をそそるようなものである。望ましい読書のあり方を積極的に指導して、良書に親しみ悪書に動かされない生徒にすることが肝心だということになった。そして、高2は読書指導に一番ふさわしい年代だから、それをLTでとり上げて広く指導したらどうかということになり、H・R担任と協議してさっそくH・Rごとに実施することになった。LT実施表（前掲）の5月6日の2A、2Bの欄がそれである。内容を記録に従って整理すると、

2Aでは、グループに分かれて話し合いをし、その結果をH・R全体で話し合う方法で、次の順序に従って実施した。

- いままで読んだ本についての話し合い。
  - 個人個人の体験を発表。
- 読書についての考え方。（読書論）
  - 読書をしている時間のこと。
  - よい本とは。
  - 苦境のはげましとなるか。
- 読書をどのようにしたらよいか。
  - 選択をどうするか。
  - 読書速度について
  - 読書時間の割り出し方。
  - 読書後はどうするか。

全体として、「獣の叫び」と直接結びつくものは出なかったが、2年の初めのLTで「読書について」考えたことは一年の指針を与えることにもなり有益であった。

2Bにおいては、担当の第一班が次回の予告をして各人に考えをまとめさせておいた。LTにおける展開は次の通り。

- 第1班のものが1人ずつ教壇に立ち、読書についての体験や意見を発表、出された項目は、
  - 乱読。読書の好き嫌い。読書記録。読書の必要性。参考書の利用。良書とは。図書館の利用。科学系の書物
- 発表された意見に対する質疑を中心として、全員で話し合い。その要点は、
  - 打算的な読み方。自分のための読み方。批判的な読み方。知識をうる読み方。目的にそって読み方。文学書のよさ
- 挙手による調査
  - 学校の図書館をどの程度利用しているか。
  - 2年生になってから読んだ本は何冊か。

4.最後に、担任がまとめとして、

「今日の意見発表と話し合いは、主によい本や、よい読み方についてのものであったから、逆にわるい本やわるい読み方とは何か」を約5分話す。

〔3年の場合〕

5月13日の3AのLT,「校長講話」を実施したいきさつを述べよう。

本校でも3年になると、それまで1人1クラブ参加であったのが自由参加形式となり、生徒会活動からも手を引くことが慣例となってきて、受験に対する構えをとり始めることはやむをえない現状と認めないわけにはいかない。問題は、学校全体の動きから離れることで、より積極的な目標に立ち向かおうとせず、気ままな行動をとったり、行動の目標を失ったりした状態を生ずることにある。4月中旬の高3生徒の起こした下駄箱破壊事件は、そうした不安定な状態の現れの一つであった。比較的優秀で活動的な生徒も混えた10数名のものが、生徒用下駄箱を破壊した事件で、指導部長と担任の出席のもとに話し合いの時間をもち、結論的には、自発的に、彼等が補修することで決着したが、この事をきっかけにして、高3の学年初めにおけるこうした不安定な状態の指導の必要性が痛感された。

担任と指導部との相談の結果、LTの時間に高3合併で「校長講話」をして、生徒に高3としてのあり方をつかませたらということになり、それぞれH・Rで計画を練ることになった。3Aではこの計画が取り入れられ、5月13日に「高校生活における個人のあり方」という秋元校長の話が行なわれた。同時に合併で行なう予定であった3Bについては、運動場の予約もあり、ソフトボール大会に備えての練習を行ないたいというH・Rの希望が強く、学校長の諒承の下に、自省の場を与える意味で強制はしなかった。

この場合、指導部の意図の半分が実施されたことになるが、実施されなかった3Bにおいて、3Aと同等の効果あるLT活動になっていたかどうか。生徒によるLT運営の限界を考える一つの材料となるのではないだろうか。

〔LTの公開〕

第一学期のLTの結果から、第二学期において、各H・R1時間ずつLTを全教官に公開で行ない、その時間を録音してみようということになった。これは、各H・RのLT活動を充実させるための参考とし、間接的に各H・Rの連携を強め、級風と校風のつながりの一つにしたいとの考えから、指導部の担当で実施

することになり、実施中である。

### 3. HRと校風の関連

前項で、生徒指導の一環として、学年に共通したL・Tを実施していることを述べた。本項目では、校内の雰囲気を感じ上げるために、L・Tを活用している例を第一学期の実践から拾ってみよう。

〔生徒会活動とL・T〕

5月における生徒会執行部(6名)の活動は、生徒会予算(総額70万円)の編成であった。最初、体育・文化各クラブ長(計17名)及び顧問教官との話し合いから始め、ついで、中学生徒会との協議(予算編成権は高校にある)を行ない、成案を得た。その案を、生徒議会(各H・RよりH・R代表4名ずつをもって構成)に提出審議し、H・R代表に責任を持って各H・Rにおいて討議することを依頼した。

ほぼすべてのH・R代表は、期日の関係もあって、6月3月のL・Tを各H・Rにおける生徒会予算審議の場とするように交渉して、結果的には、共通のL・Tを行なうことになったのである。(IIの3の実施状況表参照)

一方、慣例にしたがって教官会議で、指導部(生徒会顧問)から報告し、次の6月10日のL・Tを生徒総会(生徒会予算審議、承認)にふり替えた旨の発言をして、全校共通のL・Tを持つことになった。6月10日のL・Tの時間の生徒総会は、体育館において生徒会主催のもとに開かれ、予算審議、承認の過程を通じて本年度の生徒会活動の方針が実際の場面の裏づけのもとに生徒全員にゆきわたる結果となった。

こうしたH・Rと生徒会活動の密接な関連が学校の雰囲気を作りあげていく有力な要素の一つとなることは(IIIの1)の校風を形づくるものの一つとして生徒会執行部が多く生徒によってあげられている調査結果からも裏づけられている。

〔校内大会とL・T〕

本校では、年間5回のクラス対抗校内体育大会が行なわれている。第一学期には、中間テスト後の一日を費して行ったソフト・ボール大会(対金沢大付高戦出場チーム選抜を兼ねる)と期末テスト後のL・Tを含めた一日を費したバレー・ボール大会とが行なわれた。運営は体育委員会(委員会は生徒会に属し、文化・体育・生活・図書・放送・厚生)の6委員会があり、主に奉仕的な活動をしている。)が中心。

第一学期のL・T実施状況表を見ると、両大会の前は両種目の練習を行なうH・Rが多く、結果的に全校に共通してクラスのみをまとまりをねらいとしたL・Tを行なったことになっている。したがって、L・Tでの

## B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

運動場使用の申し出も多く、指導部で予約調整しているほどである。

### 4. H・R運営上の問題点

前項までに述べてきた本校のL・Tの実施状況をまとめてみると、指導要領に示された五項目を扱った内容のもの（印象に残ったL・Tはこれが多かった。）と校内生活問題や本校の生徒指導問題と関連の深い内容のもの（共通のL・Tという表現でまとめたもの）とに分けて考えることができる。

この二つのものは、もちろん一段高い見地からは全く一つの領域の異なった表現にすぎないが、実際問題として、指導部とH・Rとの密接な有機的連けを構成してゆくためには、校内生活問題や生徒指導問題を扱わねばならないことがある。すでに、そうしたことを予測して計画をたてているH・Rもあるが、そうするとL・T内容を狭少にするきらいがあって、不満感が残る。この両立を如何にしてはかるかが第一の問題である。

現在、L・Tは木曜の6限、S・Tは火一金曜の昼食後の10分間、朝礼を月曜の朝20分間行なっているのがH・R活動と生徒指導関係の定時の時間割りである。これを整理し、変更するところがあれば変更して、L・T活動や生徒指導が無理なく円滑に行なわれるよう考えることも問題点の一つと考えられる。ことにS・Tの活動状況は低調で、その計画を運営と合せて考慮する必要があるのが現状である。

次に、生徒指導組織の問題を見ると、中高合併の組織のあり方や教官と事務関係職員との連絡の問題を考

えていかなければならないと思われる。又、研究日を週一日とった勤務形態に見合う指導組織も問題になるであろう。これらはその運用面と関連づけて、今後の研究にまつ課題である。なお、生徒のH・Rにおける組織や生徒会機構も研究課題になるだろうが、学級増に併なう学校の体質変化の過程の中で、これら教官も生徒も含めた組織のあり方を吟味しなおすことは単に当面の必要のみでなく、また興味ある問題であるとも考えている次第である。

さて、本校の生徒指導関係の予算としては、先の生徒会予算70万と各H・Rに年間5千円の学級費及び指導部費5万円が、直接に関係のあるものであって、従来慣例的にこの程度で運営している。しかし、生徒指導や生徒会活動の適正な予算の裏づけも根本的な検討の時期にきていると考えられる。

又、こうした生徒管理、指導の場としてのH・Rの定員や生徒構成、配置や環境などの問題、H・Rと生徒会の関係、H・Rと教官の関係なども問題としてとりあげて行きたいと思う。そうして、望ましい生徒指導は理想的な生徒管理の下に生まれるという観点に立って、このような本校における生徒指導の諸問題をほり下げて行きたいと考えているのである。

## IV. いくつかの試み

### 1. 学校の雰囲気

本校の長所と短所を生徒達がどのように受けとっているかを知るために、記述法による調査を行なったが、その結果をまとめてみると次のようになった。

○本校の長所		1 年	2 年	3 年	計
全体の印象として (53%)	なごやかで明るい	17	17	27	61
	よくまとまり協力的	26	8	10	44
	開放的でのびのびしている	20	10	11	41
	自由な空気	12	2	7	21
	家庭的である	9	3	2	14
	礼儀正しいところあり	3	3	4	10
具体的な面から (47%)	生徒どうしが親しみやすい	32	33	20	85
	先生と生徒の間が親密	21	13	13	47
	施設、設備がよい	16	4	4	24
	すぐれた生徒がいる	7	1	0	8
	すぐれた先生がいる	1	3	3	7

○本校の短所		1 年	2 年	3 年	計
全体の印象として (63%)	気力に乏しく形式的	72	44	43	159
	温室育ちで狭少な考え	25	6	11	42
	きびしさがなくしまりなし	16	8	17	41
	まとまりがない	3	6	5	14
	中学校的である	2	4	7	13
	中途半端な自由である	1	2	3	6
具体的な面から (37%)	先生の力が入りすぎ、制約が多い	35	26	33	94
	先生と生徒の間がはなれている	5	1	15	21
	生徒会が不活発である	4	5	3	12
	附中出身者がまとまりすぎる	4	5	1	10
	よくない生徒が多い	5	1	4	10
	下級生がよくない	1	3	4	8
	クラブが不活発である	4	1	0	5

長所・短所を通じて、ほぼどの学年にも共通するものが見られる。ただ1年生にあっては、やや異なる傾向がうかがわれるが、決定的な差と考えることは無理のように思う。この1年生の傾向を、(Ⅲの1)の2つの表と合せ考えると学校の生徒構成に伴う雰囲気の変化のさまが浮んでくる。この面については、さらにくわしく調査してみたいと考えている。

次に、客観的な立場にある第三者の眼に、本校の印象がどう映るかを知らるために、教育実習を終った教生から提出された日誌の中から該当するものを拾い出してみた。対象は名大の(文・法・経・理・農)学生28名で、9月初めから二週間を学校で過ごした者であるが、その中の18名のものが、本校の印象をいろいろの形で日誌に記していた。ここでは、そのうちの批判的なものをまとめてみる。

(生徒に関する印象)

- 授業に積極性がない。(6名)
- 全体におとなしすぎる。(4名)

(先生に関する印象)

- 生徒が先生の指導方針に不満を持っている。(5名)
- 生徒指導が形式主義的。(2名)

(その他に関する印象)

- 名大附高生としてのまとまりや自主性がない。(6名)
- L・Tの内容が低次元である。(5名)
- クラブ活動にはっきりした目的がない。(4名)
- S・Tが不活発である。(1名)

○生徒集会室が必要。(1名)

○朝礼の内容を検討する必要がある。(1名)

○附中と高校の關係に考えるべき問題あり。(1名)

以上の中には、短期間の印象に基づくものであるための明らかなズレや、学生としての気軽な立場からの意見もあるが、とらわれることのない清新な見方をわれわれの参考として生かし、望ましい校風の在り方を考えてゆく資料の一つとして、やはり大切なものと思う。

## 2. いくつかの試み

### (ア) 生徒指導カード

生徒の指導は、指導事項の多様性の上に、質の正負(望ましいものと、望ましくないもの)それに量の問題(大きい事件と、ささやかな事件)もからみ、さらに指導者の判断の基準の相違も加わって、いわゆる大きな事件以外は全教官に知られることは少い。

しかし、生々として、日々に変化している生徒の一人一人に、より効果的な指導を適時に加えてゆくためには、大きな事件のみではなく、些細な事項であっても、本校の教官の誰かによって加えられた指導を適確にお互が承知していることが大切ではないかと思う。

特に、生徒指導を前向きなものにしてゆくためには、多くの教官の眼に映った一人一人の生徒の優れた特質の芽を、なるべく全教官が承知してゆくことが一つの重要な条件ではないかと思う。

この目的をなるべく手数のかからない方法で実現する手段として、「生徒指導カード」を考え、第一学期

B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

末から実施に移している。要領は、図のようなカードを全教官（含事務官）が持ち、H・Rや生徒会のような集団ではなく、個人または小集団の生徒に対して加えた指導の要点を、その都度一件一枚記入して、指導部に提出する。指導部では、必要なパンチを加えて、クラス別のカード保管箱に整理しておく。利用者は随時、必要なクラス、または生徒についての情報を、ソ

ーターを利用して簡単に抽出して集めることができ、日常の生徒指導の参考資料の外、各種の研究資料としての利用の外、学年会議などには豊富な客観的資料を提出することになると思う。結果については実施に移してから末だ日が浅いので、統計資料として十分な程度の蓄積はできておらず、次の機会にゆずりたいと考えている。

		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p			
○ア	中	1	2	3	No.	氏														
○カ	高	A	B	C															名	
○サ												単	+	+○ 1○ 2○ 3○ 4○ 5○ -○						
○タ	事項											独	-							
○ナ	指導																			
○ハ	備考																			
○マ																				
○ヤ																				
○ラ																				
○ワ																				
		0	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0			

(記入要領)

- 事項は簡明に。
- +は望ましいもの、-は望ましくないものの別。
- 指導は要点、生徒の反応などを判りやすく。
- 備考は今後の指導上、特に留意した方がよいと考えられる点や、大きい事件で未解決のときは処理の方針など。
- 月日は、報告の月日（なるべく一致するのが望ましいわけであるが）ではなく、指導の月日。
- 取り上げる程度は、小さい事項でもなるべく報告。
- 個人でなく、集団の場合もカードは個人別に。

(イ) 高一のオリエンテーション

これは、とくに目新しいことではない。しかし、これまで中学からの一貫教育であったところに、今年度からの学級増で高1が附中および外部中学出身者が半々となった機会をとらえて、高1におけるオリエンテーションという問題を吟味しなおすことは大層意義あることと考え、指導部と高1の担任を中心に立案、教官会議で承認された次のような計画に従って実施した。

4月10日(土)

学年で合併して

1時限

名大附属高校について

- 学校の方針
- 学校の組織
- その他

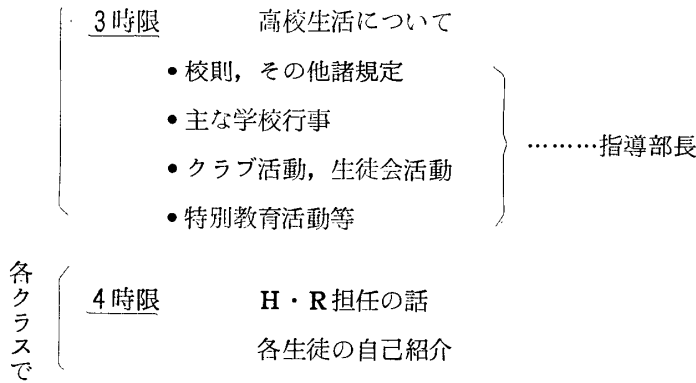
.....運営委員

- 高校生としての勉強の態度
- 教科課程及び単位制と学年制
- その他落第制度について

.....教務部長

2時限

図書館について.....図書部長



反省として、「生徒の自己紹介」がとくに有効であった。教官側の説明は少し整理して、各クラス別の時間を多くすること。生徒会代表による説明も加えるようになったなどである。

(ウ) 朝礼のもち方について

毎月曜日の朝、20分間行なっている朝礼が、従来は「学校長の話」と「指導部長の注意」が中心であった。これを「生徒会」にも分担させる形で実施すれば、学校生活をより充実したものにするとともに、生徒会執行部が生徒から浮き上ることを防ぐきっかけになるだろうとの話し合いから、第2学期の初めから生徒会と相談し、実行に移すよう指導した。その結果、学校の都合で朝礼を中止と予定したときにも、生徒会の方からの要求で朝礼を実施したこともあるほどなってきた。

また、秋の学校行事の準備・実施を生徒会の統制のもとに例年以上に盛り上がったものとする気運も、この一寸とした朝礼のもち方の工夫から生れてきつつあるように思われる。

これらのことは生徒会執行部を学校側の御用機関のような扱いをしては、もちろんできるものでもなく、また執行部の独走は許すべきことでもないから、自然・指導部と生徒会との話し合いも繁く持たれることになり、相互の理解・協力も十分行なわれるようになってきている。

(エ) 学校に対する期待などの調査

生徒構成が変化した高1の問題を、ほり下げて考えていくために、9月になってから新たに、学校に対する期待などの調査を行なった。その結果を整理すると次のようになる。

(問) あなたが本校の進適を受けることに決めるとき、最も強い影響をうけたのはだれの意見ですか。

出身 中学	先生 (担任)	父 母	父母以外の家族	友人 (先輩)	その他 (自己など)
附 属	29	47	1	8	15 (%)
外 部	36	28	5	10	21 (%)

(問) その意見の中で最も大きな理由となったことを、一つだけ具体的に書きなさい。

消極的な理由 61%	容易に入学できるということ	15
	他の高校を受験する理由がない	8
	本校以外ではよい高校に行けそうにない	8
積極的な理由 31%	本校の教育がよいと考えた	7
	自分の力を伸ばすことができると思った	7
そ の 他 18%	経済的な理由から	6
	受験に気を使う必要がなかった	2
消極的な理由 38%	受験の練習にと考えて	15
	自分の力程度の学校だから	6

B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

(外部中学出身)

積極的な理由 23%	小定員校のよさにひかれて	5
	個性を伸ばすのによい学校だから	4
	レベルの高い学校だと考えて	3
その他 39%	国立でよい学校だから	19
	交通が便利などところにある	3

次に、外部中学出身生徒に対して、本校に入学前に本校にどのような期待を持っていたか。その期待のはずれだと思うものが、第2学期の初めにどの程度あるか。その原因は何か。という点を調査した。

事 項	入学前の期待	第2学期の初めに期待がはずれたと思っ ているもの (左の数の内数)
設備が充実している	19	0
生徒会活動が活発である	16	11
自由な雰囲気がある	16	5
小定員だから皆と親しめる	12	5
のんびりしていてよい	11	5
先生と親しくなれる	10	7
楽しい学校生活が過ごせる	10	2
平凡だが落ち着いた学校	7	4
勉強しやすい	7	2
なごやかな学校である	7	0
その他の14項目の合計	53	14

(期待はずれとなった原因の主なもの。)

- 先生方の意見が強く反映しすぎる。……………16
- 生徒が一体となって学校生活を推進する気力に乏しい。……………8
- 学校生活が習慣に流されている。……………6
- 生徒会の執行部の活動が低調である。……………5
- 若い先生が少ない。……………4
- 全体に、個人のことで手一杯な生徒が多い。……………4

ついで、附中出身者に対する調査で、附高へ進学して変わったと思うことを記述させた。

事 項	入学前に考えていたもの	第2学期の初めにはそう思わ ないもの
生徒会が活発である	27	9
生徒の意見が尊重される	12	5
高校は義務教育ではない	10	0
外部中学出身者が雰囲気を変える	9	1
高校生は大人のように扱われる	7	2
勉強の進度がはやい	7	0

共 同 研 究

クラブ活動がさかんである	7	0
気分一新して勉強できる	5	0
その他の8項目の合計	18	0

次に、高校生になっての各自の目標と、第2学期の初めにおいて、その目標が実現の可能性があると思われるかどうかについて調査した。なお、その目標に到達できそうにないと思えるものは、何が原因でそうなったかも調査した。

区分	事 項	入学前の目標	第2学期の初めに実現の方向に向っていないもの(左の数の内数)
附中出身	クラブ活動に身を入れる	22	3
	自主的な勉強	18	11
	勉強とクラブの両立	12	2
	いろいろな経験をつみ自分を練る	10	6
	充実した生活を送る	10	5
	個性を伸ばす	9	5
	読書する	7	1
外部中学出身	クラブ活動に身を入れる	21	1
	充実した生活を送る	17	3
	1年間のはのんびりと楽しく	13	6
	自主的な勉強	11	6
	勉強とクラブの両立	11	5
	読書する	8	5
	交友を深める	8	2

目標が実現の方向に向わない理由としては次のようなものがある。

(附中出身)

- 自分の意志が弱い。……………9
- 努力を怠っている。……………9
- テストが多いので自分の勉強時間がない。…8
- 学習内容がむづかしい。……………6
- 計画がない。……………4

(外部中学出身)

- 自分の意志が弱い。……………8
- 自分の時間が少ない。……………8
- クラブ活動で体力を消耗する。……………6
- 高校に入学できて気がゆるんだ。……………4
- 勉強が気になる。……………3

以上、附属出身者と外部中学出身者とのそれぞれの学校に対する期待などの共通点と相違点を明らかにし生徒管理・指導を深めてゆくための条件をまず明らかにしようとしたのである。これらを比較要約して、確実に言えることを列挙すると次のとおりである。

- (1) 学校選択にあたって、附中出身が父母の助言によるものが多いのに対し、外部中出身では担任の助言によるものが多い。
- (2) その助言の内容が、附中出身のものには消極的なものが多い。
- (3) 本校に対する期待は、附中出身の方が具体的で本校の実状をふまえたものである。それに対し、外部中学出身にあっては、本校の外観や印象をもとにして、漠然とした期待を持っているものが多い。
- (4) 入学時にいただいた目標は、ともによく似たものであるが、外部中学出身の「1年間のはのんびり」という項目に、中学時の受験競争のはげしさが表われている点は留意していきたい。

なお、選抜方式の差から、学力の平均は外部中学出身の方がレベルが高いことを考慮して、調査結果を見ていただきたい。

3. おわりに

以上、いくつかの試みを行なって、今年度から3年



間にわたる学級増に伴う生徒構成の変化に対応しながら、生徒管理・指導の実践研究を始めたところである。中には、常識的な事項を本校の変化過程を場にして吟味しなおすことになるものもあるが、それらの実践から、前向きの何かが積極的に創造されることが期待されるように思われる。

なお、これらの試みや、われわれの実践を単に指導部ないしH・R担任のみに留まらず、校内の全教官の理解・協力という態勢に方向づけるために、本年度の研究会議（全教官によって、調査・研究を要する問題を扱う。隔週の月曜の授業後、約90分。）でこれまでに扱った指導部関係の事項を列挙すると次のようになる。

〔7月12日 「期待される人間像」について〕

「期待される人間像」の中間草案を検討し、合せて、本校の生徒指導の目標はいかにあるべきかを話し合う。

〔9月16日 生徒管理・指導について〕

指導部の実施した調査結果の集計を材料にして、H・Rや学校の現状を検討し、付連研究発表原稿のまとめにあたっての方向づけを行なう。

〔10月16日 発展的目標をもった生徒の管理・指導〕

本校における生徒の管理・指導の一貫性と発展性を具備した原則はいかにあるべきかを実践的に追求していくための研究の第1年の計画として、本年度は次の諸調査を実施していき、各問題の確認と分析を進めていることを報告・討議した。

- (1) 学校に対する期待などの調査（本稿のIVの2の(ㄨ)で既述）
- (2) 保護者の見た学校像の調査
- (3) 保護者の生徒に対する期待の調査
- (4) 道徳性診断テスト
- (5) 他校における誇りのよりどころの調査
- (6) 校風の生徒のとらえ方の調査（本稿のIVの1で既述）

この研究会議での話し合いは、高い立場から広く問題を扱い、生徒管理・指導の根本目標や生徒の達成目標を研究し、理想的な管理・指導方法を究明しようとするものであり、自由な討議を行ないうるよう、会議の内容を実施に移すにはかならず改めて教官会議の議を経なくてはならないことになっている。

一方、日常のH・R活動や学校生活の中で起きる問題で全校に共通的なものは、指導部会議（定例で隔週に行なう）で話し合い処理しているが、中には教官会議の決定に俟つ問題もあることを付記しておく。

（酒井為久・戸畑進・新村泰子）

## 第2報 「道徳」に関する本校の実態

### I. はじめに

授業としての「道徳」は一教科として各教科と同じ場で考えられるべきではなく、日常生活全てを含むものでなくてはならないであろう。その意味に於て、以下に考察するものは「道徳」に対する生徒・教師の態度の実態を把握することにより、今後の生徒指導管理に何らかの参考を期待するものである。（調査は昭和40年12月、対象生徒は中学一年87名、中学二年90名、高校一年97名、教師は「道徳」担当者4名）

### II. 調査結果

#### 1. 「道徳」の授業に対する生徒の態度

生徒の約半数は「道徳」を好きでも嫌いでもないと答えている。又三分の一の生徒は好きだと答えている。嫌いだとする生徒も少しいるけれども、積極的な理由を持っていない。（表1参照）好きでも嫌いでもない型の生徒も又嫌いといっている生徒も「道徳」の意義を彼等なりに認め、大切なものであることを知っている。（表2, 7参照）そして又彼等は全てではないにしても「道徳」から学んだことを実行している（表4参照）「道徳」は学校生活だけでなく、家庭生活にも連続していくものでなければならないが、約半数の生徒は家庭に「道徳」を持ち帰って家人に話している。（表5参照）又、それが話題となった家庭の態度はほぼ好ましいものである。（表6参照）家で話さない生徒はその理由に「話す必要がない」「反応がない」「聞いてくれない」「親は知っていることだから」「めんどうだから」などをあげている。

各教科でも同様であるが、「道徳」に生徒が、興味・関心を持っているかどうか。家庭が関心を持ってくれるかどうかは、日常生活が教材として扱われる（後述）場合が多いことを考えれば、生徒の生活態度とも大きく関係してくるのではないだろうか。

#### 2. 「道徳」に対する高校生の反省

1で見えてきた中学生の態度も「道徳」を終えた高校一年生の反省として、これを見る時、著しい変化に驚くのである。中学時代の「道徳」が「何らかの意味で自分に意味があった」と答えた者は97名中7名であった。一方、彼等が受けている「倫理」は殆んど全員が「自分にとって有意義」と答えている。学年進行に伴う調査ではないというものの、又、問題意識の差があるとはいえ極端な差である。

3. 「道徳」への教師の態度

「道徳」に対し反発するという生徒は非常に少ない。その理由としては、

- (1) 「命令—態度」の授業は全く行われていない。
- (2) 身近な日常生活や学校放送に教材を求めている。
- (3) 生徒中心の話しあい（時にはグループなどで）を通して授業の展開が行われている。
- (4) 「理解—判断—心情—態度」の授業を行っている。

などが教師の反省から考えられる。教師は「道徳」の重要性を他教科と同等（「道徳」一時間に対し、各教科一時間の比較）と考え、教材研究にかける時間もほぼ他教科と同等としている。「道徳」に対する困難点はカリキュラムと教材内容及び教授規範がないことだとしている。現行の教材は日常生活の中から取られる場合が多く指導書はあまり用いられていない。以上の考察から次のような反省が出てくる。

- (1) 「道徳」を学校内の問題としてのみ考える生徒が多い。
- (2) 家庭と「道徳」の関連が少ない。

表1 「道徳」は好きですか

	1 A	1 B	2 A	2 B	合計
好 き	15	13	20	7	55
き ら い	3	8	3	10	24
どちらでもない	26	22	22	29	99
計	44	43	45	46	178

表2 自分の為になると感じますか

	1 A	1 B	2 A	2 B	合計
な る	36	36	44	26	142
どちらでもない	7	5	1	16	29
ならない	1	2	0	4	7

表3 「道徳」に反ばつしますか

	1 A	1 B	2 A	2 B	合計
反ばつする	8	3	3	4	18
反ばつはしない	14	29	30	25	98
その通りだと思って聞く	21	11	11	16	59
(無回答)	(1)		(1)	(1)	3

- (3) 家庭の関心があまり強くない。
- (4) 中学の「道徳」と高校「倫理」への連絡がほとんどない。
- (5) カリキュラム及び教材に適当な規範が少ない。

III. ま と め

1. 表にあらわれた問題点

- (1) 「道徳」が自分の為になっていると答えた生徒の数と「道徳」が大切だと答えた生徒の数が多少くいちがっている。生徒が頭で考えて作った回答という感もするが、明らかではない。（表2, 7参照）
- (2) 中一より中二の方が反抗的な年齢であるのに「道徳」に反ばつしないという生徒の数は中二の方が多い。（表3参照）
- (3) 学年差があまりない。むしろ学級差があらわれている。

2. 今後の方向

3.の反省、及び上記の問題点の解決をしなければならないが、同時に、現在行なっている「道徳」の授業の録音による分析調査から、生徒の実態をなお深く知らねばならない。また家庭とも連絡をとり、保護者の意見をもっと知りたいと考えている。（盛田義彦）

表4 学んだことを実行しますか

	1 A	1 B	2 A	2 B	合計
す る	3	15	17	10	45
することもしないこともある	33	18	25	32	108
できない	8	10	3	4	25

表5 「道徳」に関して家で話しますか

	1 A	1 B	2 A	2 B	合計
話 す	12	23	24	20	79
話さない	32	20	21	26	99

表6 話した時の家の人の態度は

	1 A	1 B	2 A	2 B	合計
よく聞いてくれる	5	15	10	9	39
大体きいてくれる	7	7	14	10	38
聞いてくれない		1		1	2

表7 「道徳」は大切だと思いますか

	1 A	1 B	2 A	2 B	合計
大 切	30	33	35	21	119
どちらともいえない	12	9	8	21	50
大切でない	1	1	1	3	6
(無回答)	(1)		(1)	(1)	3

### 第3報 保護者の見た学校像

#### I. 調査のねらい

生徒の保護者は、本校の教育に対して現状をどのように受けとめているだろうか。そしてまた、学校にどのような教育を期待しているのだろうか。保護者の卒直な印象と意見に耳を傾け、客観的な立場からの批判を参考にして、種々の問題点をさぐり、よりよき指導のあり方を目ざしていきたいと思い、次のような調査を試みた。高一の保護者だけを対象にして実施した予備調査なので、調査の結果から断定的なことは言えないが、大体の傾向は知ることができる。特に興味深く思われることは、高一の生徒構成が附中出身者と外部の中学出身者と大体同数なので、保護者の考え方に、その二つの色彩が見られることである。

なお、この調査は不備な点を修正した上で全校の保護者に実施する予定である。

#### 保護者の見た学校像の調査

- ① お子様を本校に入学させた動機についてなるべく具体的に書いてください。
- ② 本校の教育のあり方について、現在の状態をどのように受け取っていただいているのでしょうか。また、どのような方向が望ましいとお考えになっておられるのでしょうか。次の項目について、なるべく具体的に書いてください。

- (a) 学習面の指導について
  - ア. 現在の状態
  - イ. 望ましいあり方
- (b) 生活面の指導について
  - ア. 現在の状態
  - イ. 望ましいあり方
- (c) 教師と生徒との関係
  - ア. 現在の状態
  - イ. 望ましいあり方
- (d) 教師と保護者との関係

#### 〔注〕

1. 実施 昭和40年11月末
2. 対象 高一全員の保護者 145名  
(回答者は 120名)
3. 回答者 (内訳)

出身別	生徒性別		合計
	男	女	
附中	33	28	61
外部	38	21	59
計	71	49	120

4. 各表の数字は回答の実数で比率ではない。  
なお、回答数は人数と必ずしも一致しない。(各項目について、ひとりが二つ以上の答をしている場合もある)

#### II. 調査の結果

以上のようにして、おこなった調査の結果を以下表の形にまとめてみた。

表I

① 入学の動機		附男	外男	計	附女	外女	計	合計
積極的な理由 71%	名大と関連あり、したがって教育法がたえず研究され、すぐれている。	2	9	11	6	4	10	21
	予備校の傾向が少なく、人間教育に重きがおかされている。	6	4	10	3	2	5	15
	設備が充実、環境が良い。	2	8	10	3	8	11	21
	教師がすぐれている。	5	3	8	2	5	7	15
	少数定員のため個人の能力や性格に応じた指導が期待できる。	15	5	20	3	2	5	25
	生徒の質が良い。生徒の家庭環境がよい。	2	1	3	4	2	6	9
	名大進学に有利と考えた。	2	1	3	1	1	2	5
	六年間の一貫した教育が受けられる。	5	0	5	1	0	1	6
	国立である。(設備がよい。教師がすぐれている。学費が少ない。)	3	8	11	1	0	1	12
計	42	39	81	24	24	48	129	
消極的	担任の先生にすすめられた。	1	7	8	3	1	4	12
	知人にすすめられた。	2	3	5	2	0	2	7
	通学に便利である。	2	5	7	0	5	5	12

共 同 研 究

な理由 29%	附中から自然のコースとして附高を選んだ。学校によくなれて いた。	7	0	7	2	0	2	9
	試験の時期が早いので入試の練習とした。	0	4	4	0	2	2	6
	経済上の負担が軽い。	0	3	3	0	1	1	4
	本人の希望通りに進ませた。	0	2	2	0	1	1	3
計		12	24	36	7	10	17	53

表II

② (a) 学習面の指導について		附男	外男	計	附女	外女	計	合計
ア. 現在の状態								
な肯 把定 握的 38%	受験本位の教育でなく、人間をつくる教育に重きがおかれている。	2	3	5	2	2	4	9
	進学準備の追い込みがないのは救われるが目標は大学進学にある ので多少不安である。	2	0	2	0	0	0	2
	各自の能力に応じた指導や、自主的に学習する指導が行なわれて いる。	0	2	2	1	2	3	5
	現状でよい。	10	10	20	15	5	20	40
計		14	15	29	18	9	27	56
な批 把判 握的 37%	進学指導に関しては、のんびりすぎる。	5	7	12	0	3	3	15
	宿題が少なく、手ぬるい。(家庭学習の教示が不徹底)	4	15	19	2	3	5	24
	不足学力に対する補習がないのは不親切である。	3	3	6	2	2	4	10
	教育内容の程度が高すぎる。	1	0	1	1	2	3	4
計		13	25	38	5	10	15	53
そ の 他 25%	特になし	2	4	6	3	0	3	9
	よくわからない	3	3	6	2	3	5	11
	回答なし	3	5	8	4	4	8	16
計		8	12	20	9	7	16	36
イ. 望ましいあり方								
進学適性指導をもっと強化する。(補習)		6	8	14	5	5	10	24
進学のためだけの学習でなく、人間形成を目ざした教育を重視する。		5	2	7	2	2	4	11
宿題を多くし、家庭学習の指導を徹底する。		4	8	12	2	2	4	16
競争意識を刺戟させ意欲的な学習態度を身につけさせる。		2	3	5	2	1	3	8
能力の低い生徒に対する特別指導を考慮する。		2	2	4	3	2	5	9
少数定員の利点を生かし、個性を伸ばす指導をする。		1	2	3	0	1	1	4
基礎学力を身につけさせ応用力を伸ばす。		1	2	3	1	1	2	5
別になし		5	2	7	4	3	7	14
回答なし		7	9	16	9	5	14	30
計		33	38	71	28	22	50	121

B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

表Ⅲ

(b) 生活面の指導について		附男	外男	計	附女	外女	計	合計
ア. 現在の状態								
肯定的な把握 41%	少数定員の利点を生かし、生徒の性格をよくつかんだ指導がなされている。	5	4	9	1	0	1	10
	クラブ活動が盛んなのは心身鍛錬に役立っている。	0	3	3	0	0	0	3
	家庭的な雰囲気の中で学校生活を送っている。	0	0	0	3	2	5	5
	行儀や服装がきちんと守られている。	1	1	2	1	0	1	3
	現状でよい。	9	12	21	6	3	9	30
計		15	20	35	11	5	16	51
な批判把握的 13%	きびしさに欠け生徒が甘やかされ自主性に乏しい。	2	3	5	2	4	6	11
	クラブ(特に体育系)の練習方法が非能率的である。(帰宅がおそい)	3	0	3	1	0	1	4
計		5	3	8	3	4	7	15
その他 46%	特になし	4	4	8	5	3	8	16
	よくわからない	3	2	5	4	4	8	13
	回答なし	6	10	16	6	5	11	27
計		13	16	29	15	12	27	56
イ. 望ましいあり方								
	道徳心の高揚に力を入れる。高校生にふさわしい「しつけ」の指導を強化する。	3	3	6	4	5	9	15
	もっときびしく鍛え自立心を植えつける。	3	6	9	1	1	2	11
	のびのびと、しかも覇気のある気風をつくる。	2	1	3	0	1	1	4
	クラブ活動の指導を強化する。時間を有効に使い充実させる。	2	3	5	1	0	1	6
	特になし	3	4	7	3	3	6	13
	よくわからない	4	4	8	4	2	6	14
	回答なし	16	17	33	15	9	24	57
計		33	38	71	28	21	49	120

表Ⅳ

(c) 教師と生徒との関係		附男	外男	計	附女	外女	計	合計
ア. 現在の状態								
な肯定把握的 18%	少数定員のため親近感があてよい。	5	1	6	2	1	3	9
	現状でよい。	5	7	12	0	0	0	12
	計	10	8	18	2	1	3	21
な批判把握的 13%	少数定員であるにもかかわらず親密さに欠ける。	2	7	9	3	2	5	14
	その他(世代の違いから考え方のずれがある。附中と外部との差別がある。)	1	1	2	0	1	1	3
	計	3	8	11	3	3	6	17

イ. 望ましいあり方							
教師は親近感をもって生徒に接し, よき相談相手になる。	8	6	14	2	5	7	21
個人的な接触を多くし, 個人指導を徹底する。	2	1	3	1	1	2	5
人間的な触れ合いに努力し, 教師は生徒を感化する。	1	2	3	2	1	3	6
計	11	9	20	5	7	12	32

〔注〕 「教師と生徒との関係」については, 「よへわからない」また「回答なし」が非常に多く69%を示している。

表V

(d) 教師と父兄との関係	附男	外男	計	附女	外女	計	合計
イ. 望ましいあり方							
父兄会, 個人面接の機会をもっと多くし密接な連絡をとる。	8	9	17	8	4	12	29
生徒の目立つ行動に対しては(生活, 学習)何らかの連絡をする。	9	10	19	7	3	10	29
学年だよりのようなものを月に一度ぐらい出す。	0	3	3	0	1	1	4
父兄同志の横のつながりがほしい。	2	0	2	0	1	1	3
現状でよい	4	3	7	5	2	7	14
別になし	3	4	7	2	3	5	12
回答なし	7	9	16	7	8	15	31
計	33	38	71	29	21	50	121

### Ⅲ. ま と め

以上, 調査の結果を表に整理してみても, 特に気のついたことは, きびしい受験競争の現実の中にあつて, 父兄が本校に期待しているものは何かというと, 一方では「人間の教育」を願いながら, 一方では「進学指導の強化」を願っているということである。理想を言えばこの二つは両立させるべきだろう。しかし現実の問題としては非常にむずかしいし, またそのことは現在の教育が, ゆきすぎた進学指導のために, 大いにゆがめられていることを思えばよくわかるはずである。本校に入学させた動機が「予備校的傾向が少なく, 人間教育に重きがおかれている」というところに多くの数を示し, さらに, 本校の教育の現状としてそれを把握しながら, 望ましいあり方として「進学指導の強化」を強く要望しているのである。理想としてはより高く, 広い視野に立って子どもの教育を考えることができても実際問題として, 必ずしもそうはいかないという, くい違いが回答の中にもよく表われている。例えば,

A……高校は大学入試の予備教育でないことは理解されるが, 大学への進学が一般化されている今日国立大学への合格率によって学校の名声をあげているのが現状である。生徒もまた学校のプ

ライドをもって努力している。一部の他校のように進学態勢で指導を推進してほしい。(外男)

B……一般の一流公立高校のような過激な受験教育が避けられ, 生徒のためには理想に近い教育である。しかし, 現実の受験競争の下では受験対策にもっと力を入れてほしい。(外男)

このような声は, 父兄の偽らない気持ちであり, 学校側としても耳を傾ける必要はある。しかしこのことと並んで「宿題が少なく手ぬるい」「宿題をもっと多くせよ」という要求は, 外部の中学出身者の父兄に非常に多い。これは中学校の勉強法の延長を期待し, 高校生としての自主的な学習態度を理解していないことと言えよう。これに対し, 附中出身者の場合は, 過去三年間の教育を通して, 本校の教育方針に或る程度の理解を持っていると思われる。

したがって, これらの表に示される数字をすべてそのまま受け取るのは早計で, 特に, 高校教育を受けて一年目の高一の父兄だけを対象にした調査なのであるから, この点を考慮しなければいけない。

以上, まだ予備調査の段階で調査方法の不備もあり, また表われた傾向の再現性についても危ぶまれる面がないでもない。さらに, 今後の研究によってこれらの問題点をはっきりさせ解決の道を追いかけていきたいと思います。(佐藤クニ子)

## 第4報 保護者の生徒に対する期待の調査

### I. 調査の目的

本校の保護者が自分の子どもに対してどのような期待をもっているかを全般的に把握することをねらいとする。すなわち①高校生としての子どもに対して、学習面、生活面の両面においてどのような期待をもっているか。さらに②将来における子どもに対してどのような期待をもっているかを調査することにより、本校生の保護者からみた期待される人間像の実態を把握し、生徒の管理・指導を方向づける一示唆を得ることをねらいとする。今回の調査報告は、予備調査の段階のものであるゆえ、その調査の結果から、さらにより適切な調査の内容と方法を吟味し、本調査で本来のねらいの達成をはかることを期待するものである。

### II. 調査の方法

①調査の対象 高一全体の保護者 145名。(回答者は120名)

回答者内訳

出身別	生徒性別		合計
	男	女	
附中	33	28	61
外部	38	21	59
計	71	49	120

②調査の期日 昭和41年11月末

③調査の内容 自由記述式の次のような質問を行なった。なお、この調査は、前述の保護者からみた学校像の調査とあわせて実施したものである。内容は右上の通りである。ゆえに、各項目についての解答数と人数は、必ずしも一致しないことを付記しておく。

① 御両親は高校生としてのお子様到现在どのようなことを期待しておられますか。なるべく具体的に箇条書きで1.2.3.……の番号を付して書いてください。

(a) 学習面について

(b) 生活面について

② 御両親はお子様の将来についてどのような御期待をお持ちですか。具体的に書いてください。

(a) 人間として

(b) 職業について

### III. 結果の整理

①(a) 高校生としての子どもに対する期待(学習面について)の調査の結果をまとめたものが第1表である。①(b) 高校生としての子どもに対する期待(生活面について)の調査の結果をまとめたものが第2表である。②(a) 将来における子ども人間像の調査の結果をまとめたものが第3表である。②(b) 将来における子どもの職業についての調査の結果をまとめたものが第4表である。

第1表 高校生としての子どもに対する期待(学習面)

類型	内 容	附男/外男		計	附女/外女		計	合計
(A) 大 学 進 学  17.7%	(a) 国公立大学へ入れる成績になってほしい	4	7	11	2	2		13
	(b) 一流大学へ入れる成績になってほしい	2		2				2
	(c) 名古屋大学へ入れる成績になってほしい	1	1	2				2
	(d) 大学に進学できる能力になってほしい	2	6	8	1		1	9
	(e) 義務教育の完全なる修得, 余力を大学進学に	1		1				1
	(f) 本人の希望する大学に入れてやりたい	1		1				1
	(g) 本人の能力以上の大学は希望しない	1		1				29
	小 計	12	14	26	1	2	3	29

共 同 研 究

成 績  20.1%	(a) 不得意教科をなくし、全教科が平均するように	5	2	7		2	2	9
	(b) 成績があがってほしい	2	2	4	2	2	4	8
	(c) 全国の平均程度の学力になってほしい				6		6	6
	(d) 1つでもよいから得意の科目があってほしい	2		2	1		1	3
	(e) 理数科系の成績がよくなるように		2	2	1		1	3
	(f) 高校教育の課程を満身に修業すること	1		1	1		1	2
	(g) 学校の勉強に重点をおくこと	1		1				1
	(h) テストで8割はとるように	1		1				1
	小 計	12	6	18	11	4	15	33
学 習 態 度  62.2%	(a) 計画的・能率的に学習してほしい	8	5	13	1	7	8	21
	(b) 自発的・意欲的に学習してほしい	8	2	10	2	3	5	15
	(c) 勢いっぱいの努力をしてほしい	4	3	7	4	3	7	14
	(d) こつこつとまじめに勉強の積み重ねをしてほしい	2	5	7	1	1	2	9
	(e) 真げんに学習してほしい	2	3	5	2	2	4	9
	(f) 疑問は教師に質問して徹底的に解明するよう	3	2	5	2		2	7
	(g) テストのための勉強でなく身につく学習	4	1	5		1	1	6
	(h) 予習復習をしっかりとる	2	2	4	1		1	5
	(i) 学生としての立場を自覚してほしい	1	2	3				3
	(j) 特に研究したいことは進んでやればよい	1	2	3				3
	(k) 学習することの喜びを感じとらせた		2	2				2
	(l) 読書に対する与心がうすく程度も低すぎる		2	2				2
	(m) その他(注)	2	1	3	2	1	3	6
小 計	37	32	69	15	18	33	102	

注) その他には「能力に応じた学習を」意志を強く、最後まで完成すること」「学習の方法にもう一つ工夫を」  
「のびのびした学習を」「ラジオなど聞いて勉強しないように」が含まれている。

第2表 高校生としての子どもに対する期待(生活面)

類型	内 容	附男	外男	計	附女	外女	計	合計
(A)  生 活 態	(a) 人の気持を考えて行動する	1	1	2	3	2	5	7
	(b) 活発で行動力がある	2	2	4	1		1	5
	(c) 諸体験を通して人格形成に心がける	3		3	1		1	4
	(d) 楽しい悔いのない生活態度		1	1				1
	(e) 感情で動かない行動					1	1	1
	(f) 世の中の動きに関心をもつ				1		1	1
	(g) 経済的認識を身につける				1		1	1
	(h) 他人に左右されない自己の確立	3	5	8		2	2	10
	(i) 協調性	4	4	8		2	2	10



B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

49.3%	度	(j) すなおにのびのびしてほしい	1	5	6	3	1	4	10
		(k) 情操豊かに	1	2	3	3	1	4	7
		(l) 責任感がある	1	3	4				4
		(m) 愛情深く		2	2				2
		(n) 忍耐力	1	1	2				2
		(o) 存在価値のある人間		1	1				1
		(p) エリート意識をもたないでほしい				1		1	1
		小 計	17	27	44	14	9	23	67
33.8%	(B) 生活習慣	(a) 生活を規則的に時間を有効に	4	3	7	2	1	3	10
		(b) 家でかくしごとなく何でも話す	5		5		1	1	6
		(c) 家族円満になるよう努力してほしい	3	2	5				5
		(d) 身のまわりの整理整とんをよくする	4		4		1	1	5
		(e) もう少し家の手伝いをするように				2	2	4	4
		(f) 自分のことは自分でする	2		2	1		1	3
		(g) 余暇を趣味によって有意義に		2	2				2
		(h) 物を大切にする	1		1				1
		(i) 休暇中の生活に一層の工夫を					1	1	1
		(j) その他(注)	5	3	8	1		1	9
	小 計	24	10	34	6	6	12	46	
5.1%	(C) 友人関係	(a) よい友達をもち交流を深めるよう	2	2	4	1		1	5
		(b) 友人がもっとあってほしい	1		1				1
		(c) 近所でもよい友達をつくってほしい	1		1				1
		小 計	4	2	6	1		1	7
8.1%	(D) からだ	(a) からだをきたえて健康であってほしい	3	8	11				11
3.7%	(E) 現状持	(a) 現在のままでよい	1	4	5				5

(注) その他には「テレビを見すぎる」「ことばをていねいに」「学生としての節度を保つ」「服装にこだわるな」「レジャーを求めすぎる」「クラブ活動の問題」などが含まれる。

第3表 将来の人像圖

類型	内 容	附男	外男	計	附女	外女	計	合計
(A) 調和的	(a) 平凡な社会の中間層としての人間	4	5	9	5		5	14
	(b) まじめで正直な人	6	5	11		1	1	12
	(c) 幸福な家庭人	1	1	2	5	3	8	10
	(d) 明るく健全な人	2	1	3	3	3	6	9
	(e) 常に努力する人	1	4	5	1	1	2	7

共 同 研 究

個 人 32.0%	(f) すなおな人		1	1	2	4	6	7
	(g) 物欲をもたず他人を羨望しない人					2	2	2
	(h) やさしい人	1		1				1
	小 計	15	17	32	16	14	30	62
(B) 個 性 的 ・ 自 主 的 人 間 29.4%	(a) 意志の強い人	3	8	11	3		3	14
	(b) 責任感のある人	1	8	9	1		1	10
	(c) 自主独立心のある人		6	6	1		1	7
	(d) 正しい批判力判断力を持った人	3	2	5	1	1	2	7
	(e) 正しいことはどこまでもやりぬく人	4	1	5				5
	(f) 根性のある人間	3		3		1	1	4
	(g) 積極性のある人間	3		3	1		1	4
	(h) 一本筋の通った人間		1	1	1		1	2
	(i) 野心や情熱のある人間	1		1				1
	(j) この子でなければできないことをしてほしい		1	1				1
	(k) 計画性のある人間				1		1	1
	(l) 趣味をもった人		1	1				1
小 計	18	28	46	9	2	11	57	
(C) 調 和 的 社 会 人 21.1%	(a) 人に好かれる人	4	4	8	3	4	7	15
	(b) 人の和を重んじ協調的な人間		2	2	1	1	2	4
	(c) 人に迷惑をかけない人	2		2	2		2	4
	(d) 暖かい心の持主に	2	2	4				4
	(e) 円満な人間	3	1	4				4
	(f) 包容力のある思いやりのある人間	2		2		1	1	3
	(g) のびのびと自由な人間味のある人		3	3				3
	(h) 社交性のある人間	2		2				2
	(i) 応用のきく融通性のある人	1		1				1
	(j) 校友をいつまでも大切にしてほしい				1		1	1
小 計	16	12	28	7	6	13	41	
(D) 社 立 会 つ に 人 役 間 13.4%	(a) 社会のために役立つ人間	2	7	9	4		4	13
	(b) 社会人として恥ずかしくない人間		1	1	3	5	8	9
	(c) よき指導者になってほしい	1	1	2				2
	(d) 高度の社会的教養を身につけた人間		1	1				1
	(e) 部下を大切にしような人		1	1				1
小 計	3	11	14	7	5	12	26	
(E)健 康 な 人 間 4.1%	(a) 健康で体力のある人間		6	6	2		2	8
	小 計		6	6	2		2	8

B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

第4表 将来の子供の職業に対する期待

類 型	内 容	附男	外男	計	附女	外女	計	合 計	
本人の強く要求しているもの 34.8%	(a) 本人次第（自由意志にまかせる）	12	15	27	2	7	9	36	
	(b) 個性と能力を最高に生かせるもの	1		1				1	
	(c) 特技や腕を生かせるようなもの		1	1				1	
	(d) 本人の希望と適性に合っていて社会に貢献できるもの		1	1				1	
	(e) 自分の能力にあったもので時代にあったもの				1		1	1	
	小 計		13	17	30	3	7	10	40
保護者の要求が強くでているもの	(B) 技術関係 11.3%	(a) 技術者	2	2	4				4
		(b) 理工系を専攻した方面		2	2				2
		(c) 特技をもたせたい				6	1	7	7
		小 計	2	4	6	6	1	7	13
	(C) 将来性のある職業 2.7%	(a) 安定したところへ入ってやりたい	1		1				1
		(b) 将来性のある職業		1	1				1
		(c) 腰かけでなく身についた職業				1		1	1
	小 計	1	1	2	1		1	3	
	(D) 社会に役立つ職業 3.5%	(a) 社会に役立つ職業		1	1	2	1	3	4
		小 計		1	1	2	1	3	4
	(E) 家庭人 5.2%	(a) 幸福な家庭の主婦				1	1	2	2
		(b) 社会勉強のための職業				1		1	1
		(c) 職業にはつかせない					1	1	1
(d) 家庭的に応用できる職業					1		1	1	
(e) 家庭に入っても何かできる人					1		1	1	
小 計					4	2	6	6	
(F) その他 2.6%	(a) 家業をつがせる	1		1				1	
	(b) 最初に選んだ道を最後まで続ける。	1		1				1	
	(c) 有名人になってほしい					1	1	1	
	小 計	2		2		1	1	3	
未 定 16.5%	(G) 未 定	7	5	12	4	2	6	18	
	(b) 目下検討中	1		1				1	
	小 計	8	5	13	4	2	6	19	
職 種 で 14.8%	(H) サラリーマン								
	(a) 公務員	1	5	6				6	
	(b) 会社員	2	1	3				3	
	(c) 教師		1	1	2	2		3	
	(d) ジャーナリスト	1	1	2				2	
	(e) 銀行員	1		1				1	
小 計	5	8	13	2	2		15		

書 か れ た も の	(I) 技 術 家 4.3%	(a) 医師	1	1	2			2
		(b) 通訳		1	1			1
		(c) 建築家	1		1			1
		(d) 栄養工			1		1	1
		小 計	2	2	4	1	1	5
	(J) そ の 他 4.3%	(a) 政治家		2	2			2
		(b) 貿易商		1	1			1
		(c) 弁護士		1	1			1
		(d) 実業家		1	1			1
		小 計		5	5			5

#### IV. 結果の考察

第1表については、全体の比率からみて(C)学習態度について書かれたものが一番多くなっているが、これは、高一という学年的制約によるものであり、(A)・(B)の項目が学年の進行にともない増加することは予測できる。(A)の解答内容についてみると、(a)(b)(c)(d)は、大学進学を強く要求するもので、その点で(e)(f)(g)の内容とは、質を異にするものであるが、ここで(e)(f)(g)が外男にはみられないということ、少数ながら外男の方が(a)~(d)の解答総計が附男より多いということを考え合わせ、外男のプロテクトの方が大学進学に対する要求をより強くもっているといえよう。さらに大学進学については男女において期待度にちがいがあるといえる。

つぎに(B)の成績においては、男女のちがいがほとんどみられない。内容からみて(a)(b)(c)の数が多いうことは当然であろう。

最後に(C)の学習態度(方法もふくむ)においては、総括してみると「計画的に能率よく、自発的に努力の上にも努力をつみ重ねてほしい」という現代の親のねがいの一般的傾向がよくあらわれている。ここで、(f)「疑問は教師によく質問して」という声はかなり強いということは、考えねばならない問題が含まれているといえるであろう。

第2表については、(A)生活態度のまとめ方にやや疑問があり、つぎの②(a)との重複的な面が考えられるということより、質問の方法に一考を要するといえる。試みに(a)~(g)に **Personality** の表層的な面、以下に深層的な面という二つに分類してみた。(B)に態度の中でも習慣化されている日常生活的なものを特にわけてみたのであるが、家庭における高校生活の望ましいあり方については、かなり具体的な要求が多方面にわたって書かれている。しかし、ここで大きな問題として、高校生のもっと広い生活、さらに

は、人生における一時期にある高校生に対する独自の人間としてのあり方に対する期待についての回答が非常に少ないということがあげられる。それを単に、両親の子どもに対する理解の不十分であるとはいえない。むしろ、調査そのものの吟味が必要であろう。同様のことが(C)友人関係にもいえることであるし、ここでは、とくに異性関係について何らの意見がみられなかったことと合わせて考えていく必要がある。

第3表については、一応(A)~(E)に類型化してみたが、まずこのこと自体問題がないとはいえない。つぎに、その具体的内容が(A)~(E)のどれに妥当するかについては、多くの問題がある。しかし、このような限界の中でいえることは、(B)個性的・自主的人間、(D)社会に役立つ人間になってほしいという期待が外男の方に多く、(C)人の和を尊重する、対人関係における調和的な社会人が逆に附男の方が多いという興味ある傾向があるということである。女子においては、平凡で、平均的な個人として調和のとれている人間(A)になってほしいという期待が多く、(B)に対する期待が少ない。このことは、女子に対する理想像にやや進歩性に欠ける傾向があるといえないだろうか。また、女子でいう社会人と男子のそれとは、その意味に相違があり、より明確に男女の相違がでてくるような調査を考えだしていかねばならないだろう。

第4表からは、本人の要求をかなり強く尊重する傾向がみられる。さらに内容からみて(B)(C)(D)は、あい重なるものであり、職種としてあげられたものとも同一内容であると考えられることもできる。また、職種としてあげられたものの中には、技術者か銀行員・教師かジャーナリストなどというようなものがあり、その裏にある保護者の期待をもっと吟味し、事例的にまとめしていくような工夫をもあわせて考えていかねばならない。未定が16.5%もあるのは、調査対象が高一であるという学年的制約からくるものであろう。

## V. 結 び

調査の目的から、まず、調査の欠陥を明らかにすると次のようなことがいえる。自由記述式であるゆえに回答者それぞれの調査に対する構え、表現方法の相違など個人の主体的条件によって左右され、真に意図するものが同次元で書れているかどうか多くの疑問がある。この点を考慮に、本調査においては、ある程度回

答者に客観的に同一条件となる場を与えるような工夫をしていかねばならない。表現されたことばの真の意味やねらいを探り、たとえば、期待する理想像を構造的に把握できるようにするために、回答内容を関係的にとらえていくような質問の方法や整理の方法を考え出していかなければならないと考えている。

(霜田美津子)

## 生徒の道徳性・親子関係の調査

生徒の生活指導をすすめる、「道徳」の時間の指導を計画し実施していく場合、それが生徒のもっている判断や思考、彼らのパーソナリティと矛盾し、あるいは遊離してしまったり、その効果はなく、逆効果をうむ場合すらある。その実態をまず知ることが先決問題である。そのために本年度はまず「道徳性」と「親子関係」の調査を行なうことにした。

「道徳性」診断テストは、中高の全生徒について行なったが、その分析は目下進行中で、その結果については次の研究紀要で報告する。さらにこの角度からは明年度以降、中学一年と高校一年に焦点をしばって、その成長に伴う変化の追跡研究も併せて行ないたいと思っている。このテストは「道徳」特設以後、各地

で行なわれ、いろいろ報告も出されているので、それらと比較対照して、本校生徒の特殊性の検討も計画している。

次に「親子関係」診断テストについてであるが、このテストは①その影響が直接的に現われること。②テストの信頼度が高校生については低いことなどから中学のみに対して実施することにし、3学期に実施の予定で、その結果についても次の報告でまとめたいと思っている。

以上の諸結果を総合検討し、その上に立って今後の方策を更に考究してゆくことにしたいと思っている。

(申尾正三)